

地元・鞆の浦でしかつくれないものを

地域おこし 保命酒使った 銘菓で仕掛け

福山で菓子材料卸店を営む中島さん



記者として赴任し、すぐはれ込んだ景勝地・鞆の浦(広島県福山市)。この地には17世紀半ばから薬味酒「保命酒」が伝わる。本みりんなどをベースに薬草をつけ込むなどして製造するこの酒を使った菓子が、地域の人手で新しい名産品に育ちつつある。名付けて「保命酒銘菓」。

生みの親は中島基晴さん(39)。約1年半前、中島さんが銘菓の売り上げで水泳用具を福山市に寄贈した際に取材し、知り合った。新製品が加わったよ」と、久しぶりに声を聞き、1月下旬、共同開発する地元の保命酒店を訪ねた。



むよつこ菓子を眺めた。市内の菓子材料卸店に生まれた中島さんは小学生のころ、水泳の五輪選手が夢で、毎日プールに通った。コーチは見知らぬ子にも世話を焼く。近所のおじちゃんたちだ。大人たちの特訓で市の選抜選手になれた誇らしさが、古里への愛情をほぐくんできた。自分が大人になったら、子どもたちが地元を好きになるよう手伝いたい。

「慶応大進学時、30歳で帰郷する」と決めていた。東京の大手商社に就職、3年後には同大学の業務改革チームに移ったが、決意した通り、30歳を機に実家に戻り、家業に就いた。近所の子どもたちに水泳を教えながら、ずっと考えていたことがある。「ようしたら、

福山の名を全国に知ってもらえるだろう」倉敷と尾道の間、と表現されるほど、全国的な福山の知名度は低い。商社時代の知人に「帰省したら、もみじ饅頭(宮島名産)を買ってきて」と言われ、悔しい思いもした。「家業を生かせないか」と発案したのが保命酒銘菓だ。旧知の菓子店主らへアプローチに協力を仰いだ。

「地元でしか作れない銘菓を」。同じ思いを抱く仲間のアイデアと経験で、菓子作りは着々と進んだ。シヨコラやプリン作りに協力した洋菓子店長の檀上尚秀さん(41)「写真上」は「試作品でこちらが納得できていない部分は必ず指摘された」と中島さんの情熱に感心する。

小学校の恩師、北村富喜子さん(74)「写真下」は「菓子作りに取り組み真剣さは、水泳に打ち込んだ子ども時代のまま」目を細める。

「目標はHOMETOWN(ほめタウン)福山」。ホームタウンを「保命酒」の響きに置き換えたんです。中島さんの地元への思いを聞きながら、アメ玉を口にした。甘さとほのかな苦さが口いっぱい広がる。同時に、胸の中に、かけがえのない人や街と出会えた喜びが広がった。(桜井悠介)

「自慢の品を広く知ってもらいたい」。保命酒銘菓を前に笑顔を見せる中島さん(左から2人目、福山市鞆町で)

